

「若者シンポジウム」第3テーマ『過去の歴史から現代を考える』要旨

＜発表者・論文名＞

- ・ 邱吉さん 関西大学大学院東アジア文化研究科博士課程前期2年
優秀賞「王一亭の日本交友からみた日中関係と今後への模索
—水野梅曉・長尾雨山・山本竟山を中心に」
- ・ 王継洲さん 早稲田大学社会科学部博士課程後期4年
特別賞「蠟山政道の東亜協同体論—日中戦争を收拾する手段として」

＜司会＞高山勇一 日本日中関係学会理事

司会:最初にお二人の論文が対象とする時代状況を簡単に説明します。邱さんの論文は、日清戦争（1894-95年）前後から、辛亥革命（1911年）、中華民国成立（1912年）、関東大震災（1923年）の頃迄の日中友人交友がテーマです。王さんの論文は、1931年の満洲事変から1937年の近衛文麿内閣の成立、そして日中戦争突入に至る時期の蠟山政道の戦争收拾を目指した活動についてです。それでは、まず邱さんから報告をお願いします。

邱:論文では、書画、写真などの資料にも依拠し、交友ネットワークの視点から日中友人交友における日中関係を検証し、それが示唆するものを考察した。

王一亭（1867～1938）は、浙江省出身で日清汽船の買弁（取引媒介者）、慈善事業者、能書家として活躍した。日本との長い関わりの中で、画家や文人に及ぶ幅広い人脈を持ち、日中関係改善の契機を捉えた「民間大使」の役割を果たした。

日本の交友の一人の水野梅曉（1877-1949）は、哲学館（現東洋大学）や京都の臨濟宗高桐院で学んだ人物。明治34年（1901）、上海に渡り、仏教者だけに止まらない広範な人脈を築き、太虚や王一亭といった有力者とも親交。1923年9月1日の関東大震災の折に、日本にいた中国人留学生の送還に尽力。一亭は、中国において関東大震災の救援活動の先頭に立ち、義援金を集め、米・麦などの救援物資を日本に送った。二人は、東京・横網町公園に安置された大震災を追悼する梵鐘「幽冥鐘」の寄贈においても中心人物となった。

長尾雨山（1864～1942）は、明治期の漢学者・書家・画家・篆刻家で、明治36年（1903年）に上海へ渡り、商務印書館に12年間勤務した。上海在住中に、王一亭、呉昌碩らと親交を深め、文人墨客としばしば詩者を結んで唱和していた。後に一亭は雨山のパトロンとなり、雨山は図録『一亭近画』（1922年）のために序文を書くなどした。

近代日本の書家である山本竟山（1863～1934）は、1902年から1930年にかけて計7

回も中国に遊学し、王一亭、呉昌碩などの文人墨客とネットワークを組んで、近代の日中書画交流を促進した。一亭が紫陽花を描いた「玉繡図」に、竟山は「王一亭画玉繡図 條幅、竟山繇定題簽」と署した。1921年、竟山が一亭、呉昌碩と上海の六三園で再会し、記念として三人は「山本竟山肖像」を制作。一亭の賛には、竟山が道家の学者のように温かい人柄であると墨書され、その幅の広い教養と真理の探究において抜きん出ていると書かれている。

王一亭とその交友ネットワークから見れば、この文人交遊は20世紀初頭の日中美術交流の主な形である。日中文人の残した書画作品は、20世紀初頭における日中美術交流の繁栄の証であり、日中友好のまぎれもない基礎であり、両国文化のソフトパワーでもある。

これからは若い世代が、先人の残した友誼の伝統を継いでいくことが重要。例えば、国際交流基金は日中両国民の友好交流の活動拠点として、杭州、昆明、成都、ハルビンなどの都市で「ふれあいの場」を開設し、小生はそれに参加した。こうした交流を通じて信頼関係を築き、結びつきを強めることができる。また、定期的に美術イベントや美術展覧会を開催することで「物の交流」の発展を促すことも重要である。「物」を通して「人の交流」を実現し、そして共感つまり「精神的交流」が生まれる。芸術作品の伝える「真・善・美」を生かし、若い世代の心を動かす「芸術の力」で、日中友好と相互理解の両方を進めることができると確信している。

司会： 邱さんありがとうございました。では会場の参加者の皆さんから質問やコメントをいただきたいと思います。

参加者A： 交流において、明治期の日本の文人たちは中国語を話せたのですか。あるいは王一亭さんが通訳の労をとったのか、あるいは漢文でコミュニケーションしていたのか？

邱： 王一亭は日本語ができた。当時の日本の文人は漢学の素養・学識が高く、漢文を通して交流した。

参加者B： 王一亭さんは中華民国の買弁階級で、親日派ともいわれた。この交流は素晴らしいと思うが、中国政府はどのように位置付けているか。人民日報や新華社はこの交流を肯定的に取り上げているか、あるいは今後取り上げるのだろうか。

邱： 王一亭をめぐる研究は、中国よりも香港や台湾で圧倒的に多い。一亭は買弁であると同時に芸術家でもあった。1920年代から30年代の日中の美術交流ブームでは、なく

てはならない位置づけの人だった。

司会：では次に、王継洲さんから論文の「蠟山政道の東亜協同体論—日中戦争を收拾する手段として」を報告していただきたいと思います。

王：蠟山政道は、1895年生まれで東京帝国大学法学部政治学科を卒業。1928年に東京帝国大学法学部教授となり、近衛文麿のブレーンにもなった。日中戦争勃発後、時局は日本の知識人に戦争の原因、目的、意義を明らかにし、戦争を收拾するという任務を与え、蠟山の東亜協同体論はその一つの応えであった。本論文では、政策論の観点から、蠟山の満洲問題解決策はどのように東亜協同体論へ変化し、この過程において蠟山が昭和研究会、汪兆銘政権の成立にいかに関わっていたか、東亜協同体論の限界はどこにあるかを明らかにしたいと考えた。

1931年に満洲事変が勃発し、翌年に満洲国が作られた。日本国内では満洲国を承認する声が高かったが、蠟山は国際連盟、欧米諸国と共にこの問題処理しなければならないと考え、満洲国の日本単独での承認に反対。東大の知識人を集めて満洲国問題解決案を作った。蠟山は、満洲を日本の領土にするのではなく、国際緩衝地帯にしたかったが、その声は届かず、日本政府は単独承認した。蠟山は「知識人だけではだめですね……その政策におろすときに、そういう実際家との接触がないとできないですね」と回想。

その後、近衛文麿の親友の後藤隆之助が、国策研究機関を作るために蠟山に協力を要請。政治家と積極的に交流したかった蠟山はこれを引き受け、昭和研究会を設立した。1937年6月、近衛は内閣総理大臣に任命された。この時蠟山は、近衛に「組閣する前に蒋介石と会ってみたらどうですか。組閣してしまってからでは、中国政策を作るというわけにいかないでしょう。むしろ蒋介石と会って、その上で中国政策を加味した内閣をお作りになったらいいじゃないか」と積極的に進言した。しかし、近衛の関心は、「臨時議会」にあり、中国問題を「第二次的」に考え、蠟山の進言を受け入れようとしなかった。

1か月後の7月に盧溝橋事件が勃発。蠟山は、日中の全面戦争と世界戦争への可能性を予想。「日本の政治には戦争に拠らないで、問題の建設的な解決を積極的に企てようとする外交方針や政治勢力が存在しないのであろうか」という苦悩を政治学者として抱いた。

1938年8月、中支那派遣軍が上海のアスターハウスホテルで秘密会議を開催した。出席者は、東京から招いた蠟山政道などの昭和研究会メンバー、同盟通信の松本重治、満鉄本社からの土井章、具島兼三郎等。会議の内容は、中国の現状とその対策、孫文主

義や三民主義などの政治思想に対する研究で、アジア的要素を入れた修正三民主義（排他的でない友好的な三民主義）を検討。

1938年夏から秋にかけて、松本重治が担っていた平和運動は、理論的なものと実践的なものとの幅を広げていた。アスターハウス会議の参加者のすべては、当時の汪兆銘工作のことを知らなかったが、後の流れからみると、汪兆銘が修正三民主義を受け入れていたため、この会議が汪兆銘工作の「理論作り」の会議になったといえる。

上海から日本に戻った蠟山は、もう一度どのように戦争を收拾するかを考えた。蠟山が考える日中戦争の原因は3つあった。①中国のナショナリズム、特に蒋介石の容共抗日の政策、②日本の大陸政策、日本のナショナリズムの問題、③欧米諸国の帝国主義、欧米が蒋介石の政策を支持。蠟山が考える解決策の基本は、日中両国のナショナリズムを超克する「一種のナショナリズムの連合体」を作ることにあつた（東亜協同体論）。協同体において両国は対等的な立場であつた。

東亜協同体論は日中戦争を收拾する手段であり、蠟山はその理論を利用し、日本の政治を導こうとした。しかし、1941年に太平洋戦争が勃発し、この東亜新秩序の主張は大東亜共栄圏に変容し、日中戦争を收拾するための東亜協同体論の限界を超えた。東亜協同体の建設にも結局失敗した。この歴史からは、知識人の意見は重視されるべき、民族（ナショナリズム）の対抗よりも協同（合作）が重要、などとの示唆が得られる。

司会：王さんありがとうございます。大変申し訳ありませんが、終了時間がきました。質問等は、引き続き行われる懇親会でお願いいたします。これで第3テーマを終了します。